

## ブロニスワフ・ピウスツキに関する 新刊書の出版記念会

ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ

2022年1月15日、スレクヴェクのユゼフ・ピウスツキ博物館において、ブロニスワフ・ピウスツキに関する重要な新刊書①②の出版記念会が、同博物館と国立在外ポーランド文化遺産研究所「ポロニカ」の共催で開催されました。

①『ブロニスワフ・ピウスツキ伝～〈アイヌ王〉と呼ばれたポーランド人 *Opowieść o Bronisławie Piłsudskim. Polak nazwany Królem Ajnów*』沢田和彦著、バルバラ・スウォムカ Barbara Słomka 訳。この翻訳本はブロニスワフやヴァツワフ・シェロシェフスキによるサハリン(1902-05)、北海道(1903)探検旅行から約120年後に、日本の国際交流基金とクラフの日本美術技術博物館マンガの協力を得て当館から出版されました。=下図、左の書籍=

②『ブロニスワフ・ピウスツキ～日記 *Bronisław Piłsudski. Dziennik 1882-1885*』は、手稿をもとにヨランタ・ジンドゥル Jolanta Żyndul 教授が校閲し、国立ポロニカ研究所から出版されたもう一つの代表的な自伝資料です。=右の書籍=



『ピウスツキ伝』

これまでポーランドには、アントニ・クチンスキ Antoni Kuczyński 教授、アルフレッド・マイェヴィチ Alfred F. Majewicz 教授らのブロニスワフに関する学術論文や、パヴェウ・ゴジリンスキ Paweł Goźliński (『アカン Akan』2019)、ジグムント・ミウオシェフスキ Zygmunt Miłoszewski (『価格の問題 *Kwestia ceny*』2020) の小説、イェジー・ホチウオフスキ Jerzy Chociłowski の大衆向け読み物『ブロニスワフ・ピウスツキの運命との決闘 *Bronisława Piłsudskiego pojedynek z losem*』(2018) などがあるだけでした。

ブロニスワフの物語は、民族や言語、信仰、習慣、容姿の異なる人々の間の絆の一例です。彼の〈弱小〉民族への接し方は、どこが際立っていたのか？なぜ彼は「アイヌ王」と呼ばれ、彼のために歌がいくつも作られたのか？今日(ユゼフ・ヴィンツェンティ・ピウスツキ Józef Wincenty Piłsudski のあと)ピウスツキという姓を名乗ることができる唯一の人物は、どうして日本人なのか？極東の僻遠の地にポーランド人がやってきたのはなぜか？そして最後に、領地でこの青年を形成したものと、アジアで成人した

彼が行った選択との間には関連があるのか？

『日記 1882-1885』

今や私たちは、伝記だけでなく、ブロニスワフ・ピウスツキの『日記』を読んで、これらの疑問のすべてに答えることができるでしょう。『日記 1882-1885』の手稿は、ヴィルニユスの科学アカデミー・ヴルブレフスキ図書館のアーカイヴに保管されています。ヴィルニユス本はポーランド文学の記念碑であり、歴史家や19世紀末のポーランド・ヴィルニユスの風土を知りたい人にとって貴重な資料です。若きブロニスワフの文書は、日々の家庭生活や高校生の思索、そしてヴィルニユスでの彼の生活環境の風俗に関する情報などをまとめた複雑な物語です。ここでは、成熟途上にある人物の動揺をたどり、若者の成長のあとを追うことができます。



出版記念会=上写真=は3部構成でした。

まず、ロベルト・アンジェイチック Robert Andrzejczyk 当館館長、ドロタ・ヤニシェフスカ=ヤクビャク Dorota Janiszewska-Jakubiak 国立ポロニカ研究所所長が参加者に歓迎の挨拶を述べ、次に元駐日ポーランド共和国大使で現在当館開発部長のヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカが登場しました。続いて在ポーランド日本国大使館広報文化センター所長の牧野道子さんが素晴らしいポーランド語で挨拶し、またユゼフ・ピウスツキのひ孫にあたるダヌタ・オニシュケヴィチさんがブロニスワフに魅了された自分の物語を語りました。

第一部では、日本から沢田和彦教授とブロニスワフの孫である木村和保さんのビデオメッセージが紹介されました。沢田先生は、本書の長年にわたる準備や、訳者バルバラ・スウォムカさんとの共同作業について語り、日本語原版(2019年、成文社)

の出版を支援した駐日ポーランド大使館と、ポーランド語版に共同で助成した国際交流基金とクラクフの日本美術技術博物館マンガに謝意を表しました。

木村さんは日本の原著者とポーランドの訳者に、日本ではあまり知られていない弟のユゼフについて、日本人向けの本を書くか、映画(ドキュメンタリーかフィクション)を作ることを提案しました！

その後、当館の編集者ズビグニェフ・ジェジッチ Zbigniew Dziedzic さん、エヴァ・パワシュ=ルトコフスカ Ewa Pałasz-Rutkowska 教授、バルバラ・スウォムカさん、マンガ博物館副館長のカタジナ・ノヴァク Katarzyna Nowak さんによるディスカッションが行われ、ピウスツキの極東での活動の歴史的背景、この本の特长、翻訳の難しさ、そして最後にブロニスワフ・ピウスツキの人物像を広めるためのポーランド公館の活動が紹介されました。1980年代に日本の専門家がレーザー技術を使ってピウスツキの録音を復元した偉業が語られました。残念ながら、ピウスツキのろう管が日本で修復を終えてポーランドに戻った後どうなったかはわかりません。再び姿を消したようです。

第2部には『日記 1882-1885』の出版を記念して、ヨランタ・ジンドゥル教授(歴史家、ジャーナリスト)、レシェク・ザシトウト Leszek Zasztowt 教授(ワルシャワ大学 歴史学者)、ゲストとしてリマンタス・ミクニス Rimantas Miknys 博士(元リトアニア歴史研究所所長)が参加しました。聞き手は国立ポロニカ研究所の

オルガ・クハルチク Olga Kucharczyk 博士で、特別ゲストとしてヴィルニユスのリトアニア科学アカデミー図書館のシギタス・ナルブタス Sigitas Narbutas 館長がオンライン参加、ブロニスワフが1882年につけ始めた日記の原本と革張りの小さなノートを見せました。

2冊の本の著者らによるパネルディスカッションの合間に、ピウスツキが1902～05年にアイヌの声を録音したのと同じエジソン式蓄音機をルブリンの旧ポーランド・リトアニア共和国東部地域博物館からご提供いただき、展示・再生しました。

出版記念会の後にわかったことですが、ブロニスワフの青年期(1882～85)の日記は2021年末にクラクフのアルカナ社からもヴィトルト・コヴァルスキ Witold Kowalski 氏の序文と後書き付きで出版されています。手稿からタイプライターで複製された、ニューヨークのユゼフ・ピウスツキ研究所に保管されているテキストに基づいています。タイプされた『日記』のニューヨーク版テキストには多くの誤りがありました。

記念会には90人の聴衆が参加し、のべ300人超がオンラインイベントをフォローしました。その様子は今も YouTube チャンネル\*で視聴できます。

なお、沢田先生の本はワルシャワ大学の学術誌「東方通覧 Przegląd Wschodni」賞2021(海外作品部門)の受賞が決定しました。おめでとうございます。

(Jadwiga Rodowicz-Czechowska ユゼフ・ピウスツキ博物館開発部長、元駐日ポーランド大使) 安藤厚訳

■■■■■■■■■■ 第101回 例会 ■■■■■■■■■■

2022.7.3 (日) 13:30～

札幌エルプラザ4階中研修室(北8西3)

[テーマ]

今年は①ポーランドロマン主義200年②マリア・コノプニツカ生誕180年③ユゼフ・ヴィビツキ没後200年の記念の年です。

またヤドヴィガ・ロドヴィッチ元駐日大使の「ポーランド・アイヌ『祖霊祭』シンヌラップ・クンネニサツ」プロジェクトに協力して詩劇の朗読を行います。

さらに時節柄(平和・安全・安らぎなどへの)「希求」をもう一つのテーマとします。

奮ってご参加ください。(会長 安藤厚)



- ロドヴィッチ
- 13:30 【ビデオメッセージ】 J. Rodowicz 元駐日大使
  - 13:40 【第1部】 詩劇『祖霊祭』
  - 14:20 【第2部】 希求・日本(朗読)
  - 15:00 【第3部】 希求・ポーランド(朗読、その他)

お問合せ・申込み先(必須:氏名・連絡先を→安藤へ)  
080-4071-0956, [hokkaidopolandca@gmail.com](mailto:hokkaidopolandca@gmail.com)

※感染拡大防止にご協力をお願いします。

(マスク着用、手指消毒等)

共催



協力



\* <https://youtu.be/Uxr9aOJ8YQ8>